

歴史読物

徳川家康

75年の運と決断

鳥越
一朗

戦国の世を終わらせ、260年余りも続く太平の世をもたらした

徳川家康。 この日本史上最大の成功者の
「運と決断」 とはいかなるものであったか。

全79話

その75年の生涯を追う——

1章 人質生活 1542 ～ …………… 13

- ① 天下人の誕生 …………… 13
↳ 運命の出自とタイミング
- ② 両親の離婚 …………… 15
↳ 熟女の愛に癒される？
- ③ 凶らずも、織田氏の人質に …………… 18
↳ 父・広忠の「忠誠心」に救われる？
- ④ 尾張での人質生活 …………… 22
↳ 若い家臣に支えられる？
- ⑤ 父（広忠）を失う …………… 24
↳ 松平氏当主の自覚が芽生える？
- ⑥ 人質交換で、駿府（今川方）へ …………… 26
↳ 太源雪斎の薫陶を受ける？
- ⑦ 元服し、「元信」を名乗る …………… 29
↳ 墓参を請い、老臣らと面会を果たす？
- ⑧ 築山殿（瀬名姫）を娶る …………… 32
↳ 三年ばかりの幸せな家庭生活

2章 今川氏からの自立 1560 ～ …………… 37

- ⑨ 初陣（寺部城攻め） …………… 34
↳ 勝利を治め、「元康」と改名
- ⑩ 人生を変えた「桶狭間の戦い」 …………… 37
↳ 駿府に帰らず岡崎城へ
- ⑪ 織田信長と同盟締結 …………… 40
↳ 今川氏から離れ、仇敵と結ぶ
- ⑫ 将軍・足利義輝からの要望 …………… 43
↳ 「早道馬」を提供する
- ⑬ 今川氏との人質交換 …………… 45
↳ 妻子を岡崎に引き取る
- ⑭ 嫡男・信康と信長の娘・徳姫の婚約 …………… 48
↳ 政略結婚で同盟強化を図る
- ⑮ 「元康」から「家康」へ改名 …………… 49
↳ 今川氏と完全に決別する
- ⑯ 「三河一向一揆」を鎮圧 …………… 51
↳ 一家分裂の危機を乗り越える

①7	一宮砦の後詰	54
	↳ 寡勢で多勢に立ち向かう	
①8	家臣団を編成する	56
	↳ 「三備え」と呼ばれた強力軍制	
①9	足利義昭からの上洛要請	58
	↳ 目下の問題を優先する	
②0	「徳川」に改姓し、本姓を「藤原」とする	60
	↳ 名実ともに三河国の戦国大名に	
3章	遠江侵攻 1568	62
②1	武田信玄と同盟締結	62
	↳ 違約した信玄に噛みつく	
②2	掛川城の今川氏真を攻める	65
	↳ 和睦に持ち込み、信玄の怒りを買う	
②3	信長の「越前朝倉攻め」に従軍	68
	↳ 信長とともに朽木越えて逃げ帰る	
②4	岡崎城から浜松城に本拠を移す	71
	↳ 信長の意見に従う	
②5	「姉川の戦い」に参陣	72
	↳ 家臣団を駆使し勝利に貢献する	
②6	上杉輝虎（謙信）と同盟締結	74
	↳ 武田信玄と絶縁する	
②7	「志賀の陣」に参戦	76
	↳ 信長の危機を救う	
②8	今川氏真を受け入れる	78
	↳ 元主君の嫡男を憐れむ	
②9	「三方ヶ原の戦い」で惨敗	79
	↳ 強豪武田軍相手に無謀な戦いを挑む	
③0	信玄の死により巻き返しを図る	83
	↳ 後継者・勝頼との戦いの始まり	
③1	「長篠の戦い」に勝利	85
	↳ 鉄砲の威力を認識する	
③2	高天神城の攻防	87
	↳ 信長に対し心意気を示す	
③3	築山殿殺害、信康自刃	90
	↳ 家康生涯の痛恨事	

③4	北条氏政と同盟締結 ↳ 甲相同盟の破綻に乗じる	93
4章 五カ国領有 1582		
③5	「甲斐征伐」に参戦 ↳ 武田氏の遺臣を召し抱える	95
③6	甲斐からの帰路、信長をエスコート ↳ 行き届いたサービスで信長を喜ばす	97
③7	「甲州征伐」のお礼に安土を訪問 ↳ 信長から下にも置かぬ懇応を受ける	99
③8	「本能寺の変」後、伊賀越えて帰国 ↳ 家臣の諫言で、切腹を思い留まる	101
③9	光秀追討を果たせず ↳ 秀吉の「中国大返し」に後れを取る	104
④0	甲斐・信濃へ出陣 ↳ 北条氏直と睨み合う	106
④1	北条・徳川の新たな同盟成立 ↳ 五カ国領有も火種を抱える	108
④2	秀吉とのやり取り ↳ 織田氏の内紛で、信雄・秀吉側に付く	109
5章 秀吉への臣従 1584		
④3	「小牧・長久手の戦い」で秀吉と勝負 ↳ 裏をかく戦術で、秀吉に泡を吹かせる	113
④4	上田城を攻撃するも撃退される ↳ 望まなかった戦い	117
④5	ついに秀吉の臣下となる ↳ 長いものに巻かれたか	120
④6	清華成のうえ、聚楽第行幸に従う ↳ 朝廷にも顔を売る	123
④7	五カ国総検地を実施 ↳ 領国の地盤を固める	126
④8	「小田原攻め」に参陣 ↳ 縁戚・北条氏の説得に努める	127
④9	関東転封の命下る ↳ 進んで江戸に本拠を置く	131

⑤0	「朝鮮出兵」のため名護屋へ ↳ 渡海を望む秀吉を諫める↳	133
⑤1	上方での交流の日々 ↳ 芸は身を助けたか↳	136
⑤2	「秀次事件」で速やかに起請文に署名 ↳ 秀吉から「坂東」を任される↳	139
⑤3	秀吉の死去 ↳ 遺言に従い政務を引き受ける↳	142
6章	関ヶ原合戦へ 1599 ～	146
⑤4	朝鮮からの撤兵 ↳ 速やかに帰国命令を出す↳	146
⑤5	石田三成を匿う ↳ 度量の深さを見せつける↳	148
⑤6	「会津（上杉氏）攻め」を決断 ↳ 三成の拳兵、承知で出征する？↳	150
⑤7	「小山評定」での協議 ↳ 豊臣系大名の進言で決断する↳	153
⑤8	天下分け目の「関ヶ原合戦」へ ↳ 調略を尽くして決戦に臨む↳	155
⑤9	大津城で秀忠と再会 ↳ 遅参よりも隊列の乱れを叱る↳	161
⑥0	「関ヶ原合戦」の論功行賞 ↳ 豊臣系大名に配慮する↳	163
7章	徳川幕府を創設 1601 ～	167
⑥1	蔵入地を拡充する ↳ 金銀鉱山に目を付ける↳	167
⑥2	征夷大將軍に就任 ↳ 武家の棟梁に上りつめる↳	169
⑥3	江戸に幕府を開く ↳ 頼朝に倣って、京を避ける↳	172
⑥4	秀忠に將軍職を譲る ↳ 徳川氏の世襲を世に示す↳	175
⑥5	駿府への退隱 ↳ 大御所として権力を行使する↳	177

⑥6	外交政策を開始……………	179
	↳貿易振興と貿易統制を図る↳	
⑥7	朝鮮通信使を招く……………	181
	↳朝鮮との関係改善を図る↳	
⑥8	朝廷対策を実行……………	183
	↳官女密通スキヤンダルに付け込む↳	
⑥9	キリシタン禁制……………	186
	↳豊臣氏との結びつきを警戒する↳	
⑦0	大久保忠隣を改易……………	188
	↳「武功派」の世に終止符を打つ↳	
⑦1	蝦夷と琉球……………	191
	↳フロンティアに関心を持つ↳	
8章	大坂の陣で豊臣氏を滅ぼす 1611 ……	193
⑦2	二条城で秀頼を引見……………	193
	↳豊臣氏の臣従化を図る↳	
⑦3	方広寺の鐘銘を問題に……………	195
	↳片桐且元と大蔵卿で対応を変える↳	
⑦4	「大坂冬の陣」勃発……………	199
	↳敢えて力攻めを避ける↳	
⑦5	「大坂冬の陣」の講和条件……………	202
	↳女性同士の交渉で有利に↳	
⑦6	「大坂夏の陣」で豊臣氏滅亡……………	204
	↳淀殿・秀頼母子の助命を望む?↳	
⑦7	「武家諸法度」等の制定……………	208
	↳後進に任せるための体制づくり↳	
⑦8	春日局と面会（家光の元服問題）……………	210
	↳「長幼の序」を通す↳	
⑦9	天下人の死……………	212
	↳永眠の場として日光を選ぶ↳	
	関連系図……………	217
	松平氏系図 清和源氏に繋がる得川氏系図 松平氏・水野氏関係図 家康の妻妾と子供	
	徳川幕府歴代將軍一覧……………	222
	関連年表……………	223
	関連地図……………	231
	愛知県 静岡県 山梨県……………	234
	主な参考文献……………	235
	あとがきに代えて……………	236
	著者プロフィール……………	236

人間誰しも、人生の節目節目で決断を迫られる。よい決断をすれば、普通はよい結果が得られる。しかし、決断がよかったからといって、必ずしも結果がよいとは限らない。運が悪ければ、決断はよくても結果が悪くなる時がある。逆に運がよければ、決断は間違っていないでも、よい結果に恵まれることがあるのである。とかく人生は不条理であり、だからこそ面白い――。

そういうそぶけるのは、人生の成功者だからだろう。彼らには決断も運も、結局は「結果オーライ」に繋がったのだから。歴史上、事を成した人物はみんなそうである。

で、徳川家康なのである。戦国の世を終わらせ、二百六十年余りも続く太平の世をもたらした、この日本史上最大の成功者の「運と決断」とはいかなるものであったか。上に述べた流れからすれば、それを知ったからといって、「フツウの者」の身過ぎ世過ぎには何の役にも立たないだろう。

しかし、なぜか、興味を抱いてしまうのも人情である。成功者の運と決断――自分には縁のない話だとしても、その人生を代理経験することで、ままならぬ己が人生の憂さを晴らしたい、という深層心理が働いているのかもしれない。

だとしたなら、精神衛生上、あながちそれは無意味なことではないのではないか。そう信じて、家康の七十五年に及ぶ「運と決断」の旅へ御案内することにした。いましてしよう。

1章

人質生活

1542

① 天下人の誕生

〜運命の出自とタイミング〜

人は親を選べないとはよくいわれる（昨今は、「親ガチャ」という言葉まである）。生まれてくる時代も場所もまたそうである。だからそれは、百パーセント運である。家康の場合はどうであったか。

天文十一年（一五四二）十二月二十六日、徳川家康は三河国（愛知県東部）の岡崎城（同県岡崎市）で誕生した。父親は同国の土豪、松平氏（安城松平氏）の当主・松平広忠、母は尾張国の豪族、水野忠政の娘・於大の方である。幼名は、松平氏の先例に従い、竹千代と名付けられた。

当時は戦国時代の真ただ中、三河国の周辺では、尾張国の織田氏、美濃国の斎藤氏、信濃・甲斐国の武田氏、駿河・遠江国の今川氏が、越後国の上杉氏、相模国の北条氏も交えて、有力戦国大名として互いに覇を競いあっていた。

三河国は室町時代には、仁木、大島、一色、細川などの諸氏が守護を務めたが、戦国時代に入ると守護権力が形骸化し、多くの国人（在地の領主）の中から松平氏が台頭して、西三河を中心に勢力を

広めた。

伝承によると、松平氏は、徳阿弥とくあみという時宗の僧が、三河国松平郷の領主であった松平信重のぶしげの入り婿になり、松平親氏ちかうじを名乗ったのが始まりとされる。その後、「十八松平」といわれるほど、多くの支族に分かれるが、その中から安城松平氏が発展し、七代目の清康きよやすの時代に三河国のほぼ全域を版図とするまでになり、拠点を岡崎城とした。この清康が、



岡崎城(岡崎公園/愛知県岡崎市)

広忠の父、家康の祖父である(二二七頁系図1参照)。

もつとも、織田氏や今川氏に比べれば、松平氏はいかにも弱小である。広忠の時代には西から織田氏、東から今川氏の侵攻を受けるようになる。また、松平氏同族内の権力争いもあった。

広忠は松平氏の存続のため、今川氏と不平等な盟約を結ぶ。そんな時代に、家康は松平氏の嫡男として生を受けたのである。そのために、彼は大人たちの都合によって、翻弄される幼少期を送ることになる。幼い家康にとって、それは不運には違いなかったが、その苦難の生い立ちが、彼を人間的に鍛え上げたことは想像に難くない。

また、曲がりなりに、三河を代表する武家の嫡男という立場は、彼の心を支える糧として十分に機能したはずである。出自から生まれるプライドが、(特に武士の場合)苦難を乗り越える原動力と成り得るのは、よく知られるところである。

ところで、家康が生まれた時、のちに天下人となる織田信長は八歳、豊臣秀吉は五歳であった。この二人との年齢差もまた、絶妙という気がしないでもない。親子ほどの開きはなく、長兄、次兄の後に三男坊が追いかけるという図式である。二人の偉大な先駆者が播いた種を、家康は要領よく育て、果実を収穫していったように思われるのである。

ともあれ、こうした幼少期における諸環境が、のちの天下人・徳川家康を生んだ、まずは最初の要件だったのだろうか。

② 両親の離婚

「熟女の愛に癒される?」

戦国時代の武家においても、現代同様、離婚は珍しくなかった。ただ、その理由は、現代のそれが性格の不一致とか、DV、不倫というのと違って、家同士の利害関係によるものがほとんどであった。昨日の味方は今日の敵、という時代であったから、家同士がひとたび敵同士となれば、離縁は必至だったのである。

家康の母・於大の方は、前述の通り、三河国刈谷城かりや(愛知県刈谷市)の城主・水野忠政の娘であつ

た。松平広忠と結婚するのは、家康が生まれる前年の、天文十年（一五四一）のことである。広忠は十六歳、於大の方は十四歳だった。

水野氏は、元は尾張国の知多半島北部を領地としていたが、天文二年（一五三三）に三河国に進出して、刈谷城を築いており、領土保全のため隣接の松平氏と友好関係を築く必要から、同氏と婚姻を結んだのだった。

ところが、家康が生まれて二年後の天文十三年（一五四四）、忠政の跡を継いで水野氏の当主となっていた、於大の方の兄・水野信元が、それまで松平氏とともに従っていた今川氏に背き、尾張国の織田信秀へと寝返ったのである。

その結果、今川氏との関係を重視する広忠は、やむなく於大の方を離縁した。彼女は、可愛い盛りの子が子・竹千代（家康）を残して、実家である水野氏の居城・刈谷城へ帰されたのだった。

ところで、水野氏と松平氏の婚姻はこれが初めてではなかった。於大の方の母・於富の方は、広忠の父・松平清康（家康の祖父）がその美貌を見初めたため、忠政と離婚させられ、清康の側室となっていたのである（二一九頁系図3参照）。

しかし、いくら戦国の世とはいえ、そんな略奪婚がまかり通るわけはなく、実際には、水野氏と松平氏の間起こった諍いの講和条件として、於富の方は清康に差し出されたようだ。どっちにしろ、於大の方の結婚生活もまた、母親同様、平穩には済まなかったのである。

ともあれ、こうして家康は、三歳にして実母と生き別れとなった。両親の離婚や母親との別れは、

今も昔も、幼い子どもの心に小さからぬ傷を残すものである。離婚した親が（別の相手と）再婚すればしたで、子どもの心中は複雑なものがあろうが、家康の場合はどうだったかと言うと、果たして、彼の両親はそれぞれ再婚するのである。

天文十四年（一五四五）、広忠は三河国田原城（愛知県田原市）城主・戸田康光の娘、真喜姫を後室に迎えた。家康にとっては継母である（もともと、それまでから、広忠には複数の側室がいて、男子二人、女子二人をもうけていたとされる）。

一方、於大の方は、離縁から四年後の天文十七年（一五四八）、松平氏に対抗する兄・信元の意向で、尾張国の阿古屋城（愛知県阿久比町）城主・久松俊勝に嫁がされた。広忠と後室・真喜姫の間に子どもはできなかったようだが、於大の方は、俊勝との間に三男二女をもうけた。家康の同母きょうだいたちである。

こうした複雑な家庭環境は、今なら不良少女少女のグレた言い訳に十分なり得るだろう。しかし、家康はそれを理由にひねくれてしまうことはなかったようである。その理由の一つに、ある老女の存在があったかもしれない。

生母と別れたあと、幼い家康を養育したのは、祖父・松平清康の妹（姉とも）、於久（随念院）であったといわれる（二一九



松平清康が再興した松平氏の菩提寺「大樹寺」(愛知県岡崎市)
写真提供:岡崎市

頁系図3参照)。本来なら実母から得るべき愛を、家康は、血のつながった於久から受けることができたのである(当時は結婚が早かったから、於久は老女というより熟女ぐらゐの年齢だったのだろう)。於久は、はじめ清康の養女となつて、大給松平氏三代目当主の松平乗勝(のりかつ)に嫁ぐが、乗勝と死別すると、三河国足助城(あすけ)(愛知県豊田市)城主の鈴木重直(しげなお)と再婚した。しかし、重直が松平氏に離反したため、離縁されて岡崎城に戻っていたのだ。

於久はなかなかの才女で、土地の寄進のための文書の作成にかかわるなど、城内で相当の力をもっていたようである。家康は、彼女の(おそらくは)惜しめない愛に、母を無くした寂寥感を癒しただけでなく、彼女から、幼児に必要な種々の教育を施されたに違いない。幼少期の家康にとって、正に不幸中の幸いだったのではないか。

③ 図らずも、織田氏の人質に

「父・広忠の「忠誠心」に救われる?」

岡崎城での、家康(竹千代)と於久の穏やかな生活は長くは続かなかつた。

天文十六年(一五四七)、尾張国(愛知県西部)の織田信秀が三河国に侵攻し、安祥城(あんじょう)(安城城/愛知県安城市)を攻略した後、岡崎城に迫る構えを見せた。これに対し、広忠は今川義元(よしもと)を頼り、援助の見返りとして、六歳になつていた息子の家康を、今川氏の本拠である駿府(すんぶ)(静岡県静岡市)へ送

ることに決めたのだ。

今なら幼稚園児の年齢だから、家康は事態を十分には理解できなかったであろう。しかし、周りの大人たちの様子から、余りよくないことが自分の身に起こっていることぐらいは感じ取れたのではないか。

天文十六年(一五四七)八月二日、家康は二十八名の随員と五十名余りの雑兵(ざつひょう)とともに、駿府に向け岡崎城を出立した。しかしその途上、さらによくない出来事が発生する。一行は、老津(おいつ)の浜(渥美半島)から船で駿府に向かうことになつたが、彼らに乗せた船は駿府には向かわず、あろうことか、敵方織田氏の領国である尾張国の熱田(あつた)(名古屋市熱田区)に到着したのである。

これは、今川氏から、家康を駿府へ送り届ける命を受けた戸田康光の策謀だったといわれる。康光は、陸地は敵が多いので、船でお送り申し上げると言つて、供の者を欺き、熱田へと船を進めて、家康を織田信秀に引き渡したのであつた。

康光はかつて松平氏に臣従しており、「康光」の名は、家康の祖父・松平清康の偏諱(へんき)(自分の名の一字を与えること)ともいわれる。清康の死後は、松平氏とともに今川氏に従属し、家康の父・広忠と於大の方の離婚後、娘の真喜姫を広忠に嫁がせているのは、前述のとおりである。

家康は、継母の父親である康光に、おそらくは、なんの警戒感も抱いていなかっただろう。そんな康光が、今川氏に背き、織田氏と内通していたのである(康光は、永楽銭千貫文で織田信秀に家康を売ったともいわれる)。

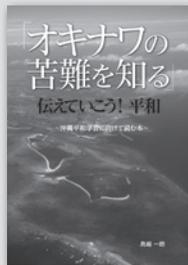


「歴史読物 陰謀の鎌倉幕府」 ～執権北条氏をめぐる内紛クロニクル～

2022年刊

定価 1650円(本体1500円+税10%) A5判 232ページ

北条氏の絡んだ67の陰謀・謀略事件を通じて、鎌倉幕府の成り立ちが理解でき、その時代の息吹を感じ取ることができます。

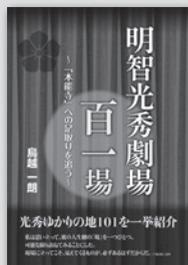


「オキナワの苦難を知る」伝えていこう! 平和 ～沖縄平和学習に向けて読む本～

2021年刊

定価 748円(本体680円+税10%) A5判 88ページ

沖縄の自然・歴史に触れ、慰霊施設を紹介するとともに、悲惨な戦争の記憶と今も続く基地問題について、その経緯と現状を紹介しています。

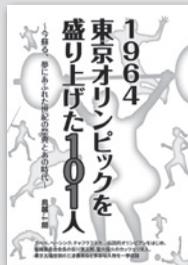


明智光秀劇場百一場～「本能寺」への足取りを追う～

2020年刊

定価 1650円(本体1500円+税10%) A5判 320ページ

本能寺の変の首謀者である光秀の、波乱に満ちた劇的人生…。その101のステージを年代順に現地の写真とともに分かりやすく紹介。光秀の意外な素顔をあぶり出します。



1964東京オリンピックを盛り上げた101人 今蘇る、夢にあふれた世紀の祭典とあの時代

2018年刊

定価 1760円(本体1600円+税10%) A5判 320ページ

1964年東京オリンピックにおいて、メダルを取った選手ばかりでなく、様々な立場で大会の盛り上げに貢献した101人を取り上げ、その素顔や「その後」にも触れながら、彼らの奮闘ぶりを紹介。

著者プロフィール

鳥越一朗 (とりごえ・いちろう)

作家。京都府京都市生まれ。
京都府立嵯峨野高等学校を経て京都大学農学部卒業。
主に京都や歴史を題材にした小説、エッセイ、紀行などを手掛ける。
「陰謀の鎌倉幕府」「オキナワの苦難を知る 伝えていこう! 平和」
「明智光秀劇場百一場」「1964 東京オリンピックを盛り上げた 101人」
「おもしろ文明開化百一話」「天下取りに絡んだ戦国の女」「ハンサムウーマン新島八重と明治の京都」「電車告知人」「京大正ロマン館」
「麗しの愛宕山鉄道鋼索線」「平安京のメリークリスマス」など著書多数。

写真協力

静岡県観光協会 浜松・浜名湖ツーリズムビューロー 掛川市 藤枝市郷土博物館
清水町教育委員会 (一社)豊橋観光コンベンション協会 豊明市観光協会
岡崎市 田原市博物館 安城市教育委員会 蒲都市観光協会 新城市観光協会
長久手市
(順不同)

歴史読物 徳川家康 75 年の運と決断

定 価	カバーに表示してあります
発行日	2023年1月1日
著 者	鳥越一朗
デザイン	岩崎宏
編集・制作補助	ユニプラン編集部 橋本豪
発行人	橋本良郎
発行所	株式会社ユニプラン 〒601-8213 京都府京都市南区久世中久世町1丁目76 TEL075-934-0003 FAX075-934-9990
振替口座	01030-3-23387
印刷所	株式会社ティ・プラス
ISBN	978-4-89704-564-1 C0021